

平成 29 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

高い知性、豊かな人間性、健やかな心身をもち、国際人として、将来、世界のさまざまな分野で活躍できる素質を育てる。

- (1) キャリア教育の充実を通じて子供たちが新しい時代、どのような社会でも生きていける力を醸成する。
- (2) 高い基礎学力と自学自習力を持った生徒の育成。
- (3) 学校行事・特別教育活動や部活動等とおして逞しい実行力、実践力を養う。
- (4) 国際理解教育と科学教育を専門学科として極めると同時に、両者のメリットを融合させ未来の世界をリードできる人材を育てる。

2 中期的目標

1. 新しい時代のキャリア教育

当校の今まで積み上げてきた資産を活かし、進路指導体制の改編（グローバルキャリア課新設）とその充実を通じ 21 世紀型キャリア構築へのサポートを実行する。主に以下の対応に強固な体制を作る。

※ 目標：今後 3 か年を見据え、長期留学派遣年 10 名以上（5 名から年間約 2 名増）。国内 SGU や海外直接進学などが行う多面的な評価での入試に強い学校を作り上げ、当領域での実績を伸ばす。

- ア 国内大学のグローバル化、海外大学進学ニーズへの対応。
- イ A0 入試や多面的評価入試（課題研究・長期・短期留学論文等）への対応。
- ウ グローバルキャリア観の醸成への対応。

2. 確かな学力への取組み

(1) 「魅力的な授業」「わかる授業」の実現と自学自習習慣の確立。

※ 目標：授業アンケート項目「生徒意識 1」「生徒意識 2」の肯定的回答の比率を毎年 85%以上を長期的に維持する。

※ 家庭等での学習時間を 3 か年で、漸次、全国平均レベル（週 12.5 時間）までに伸長させる。

- ア 教員自らの学びを推進することで授業の質の向上をめざす。
- イ 授業アンケート結果に対して分析を行うことで、問題点を明確にして授業改善に取り組む。
- ウ 生徒の自学自習を支援し、自ら学ぶ力を深めるように助力をする。自習環境を整備し、自学自習の習慣の確立をめざす。

(2) 国際理解教育の充実

※ 目標：TOEFL iBT スコア 60 点以上を 8 名以上を達成する。（骨太の英語力養成事業の目標ステージ 1 と同様）

- ア 国際人としての広い視野と感性を育て、グローバルな社会で活躍できる人材の育成を行う。
- イ コミュニケーション能力を向上させ、留学や、海外の大学への進学を推奨する中で、世界を視野に入れた人材づくりを行う。
- ウ S G H 指定校、ユネスコスクールの加盟校として、海外との交流を積極的に行い、体験活動を通して国際性に富む人材を育成する。
- エ TOEFL・TOEIC・英語検定などの資格試験に積極的に挑戦し、自ら語学力の向上を図る生徒を育てる。

(3) 科学教育の充実

※ 目標：科学系コンテストにおいて、年間に 3 件以上の入賞

- ア S S H 事業及びその人材育成枠の指定校として、その取り組みを深め、世界で活躍できるグローバルな科学人を育成する。
- イ 五感で体得する理科授業をめざして、多くの実験実習を授業に取り入れ、その効果的な活用を行う教材を開発する。
- ウ 高大連携、大学訪問研修等を実施し、高校と大学の科学教育のスムーズな接続を行うとともに、生徒の学習意欲を高める。

3 進学保障

(1) 生徒一人ひとりの進路について、自ら目標を立て、可能性を追求し挑戦する態度を養い、実現できる生徒を育成する。

※ 目標：今後 3 か年で国公立大学合格者数 30 名以上、関関同立 180 名以上

- ア 進路情報の的確な提供と、きめ細やかな進路選択の指導を行う。
- イ 進学補習を計画的に実施し、進路を実現するための学力向上、家庭等での学習時間の伸長を支援する。

4 開かれた学校づくり

(1) 学校の特色ある教育活動について、幅広く情報発信をすると共に、地域と連携し、「地域の教育拠点」としての機能を果たす。

- ア 様々な情報メディアを活用し、きめ細やかな情報の発信を行う。
- イ 学校説明会等を充実させることで、入学者に対して、本校の教育活動に対しての理解を深める。
- ウ 地域の小中学生や住民に対しての科学講座・英語講座を実施し、地域の科学教育、国際教育の中核としての地位の確立をめざす。

5 活気と規律があり、生徒が安心して生活できる学校づくり

(1) 生徒一人一人を大切にするとともに、自主性の向上をめざす。

※ 遅刻総数今後 3 か年（現約 2300 名から 300 名以上減）を目標 最終目標：遅刻総数 1500 名以下：部活動への入部率 85%以上。

- ア 個別に支援が必要な生徒への対応について、校内の組織を整備するとともに、きめ細やかな運用を実施する。
- イ 部活動を活性化し、参加者を増加させるとともに、その内容の充実を図る。また、学習と部活動を両立することのできる生徒を育てる。
- ウ 基本的な生活習慣を確立し、規律ある行動をとることのできる、社会性の豊かな生徒を育成する
- エ 生徒会活動を活性化し、学校行事やボランティアなどの体験的活動を充実させ、「生きる力」を育む。

6 教員の資質向上

(1) 学校力向上のための職員研修の充実

- ア 教職経験の少ない教員のスキルアップ
- イ 職員研修の実施

【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

| 学校教育自己診断の結果と分析 [平成 29 年 12 月実施分] | 学校協議会からの意見 |
|---|--|
| <p>○ 「泉北高校での充実感」については、生徒・保護者の満足度も高く、教員も高い意識で教育活動に当たっていると言える。</p> <p>○ 「異文化理解や国際交流、共生の学習の機会」では、生徒の肯定率が大きく伸びた。理由としては、SGH事業が3年目の完成年度を迎え3学年とも「SDGs」に関する学習を経験したこと、また、2年台湾修学旅行での中壢高級中学校との交流や留学生の歓迎会を全校体制で臨めたことなどが挙げられる。</p> <p>○ 「キャリア教育関係」については、保護者の肯定率が大きく伸びた。生徒の肯定率も79.0%（H28年度 68.5%）と高くなった。保護者向け及び生徒向けキャリア講演会の実施や進路通信「進路のお話」の発行、進路資料室の開放化などにより、生徒たちが進路情報を得やすい環境が整いつつあることが要因と言える。</p> <p>○ 「部活動との両立」は、ノークラブデイと学習活動への動機づけを行うことにより改善をめざしたい。</p> | <p>① 平成29年6月30日実施（1回）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遅刻者への対応について、夜更かしが多いなどの原因がはっきりわかる生徒への対応をもう少し組織的に取り組まれるとよい。また、教員の負担や昨今の部活指導を担当する教員の負担増など教員の膨大な仕事量の負担のケアが必要。 ・学校経営計画について取組みはすばらしいが、教員の異動等で実施する教育活動の質を維持もしくは発展できているのか確認していく必要がある。 ・英語の取組みは継続的に発展的に実施して欲しい。 <p>② 平成29年11月10日実施（2回）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目標を定めて着実に成果を出されている。 ・遅刻の習慣が大学生活でも影響しているので、期限を守る習慣をつけるとよい。 ・部活と学習の両立があまりできていないという結果について工夫が必要である。 ・読書活動の取組みについて、大学でも新聞を読むことで、それに取り組む生徒は就活でもよい成果がみられている。 <p>③ 平成 30 年 1 月 25 日実施（3回）</p> |

府立泉北高等学校

| | |
|--|---|
| | <ul style="list-style-type: none"> ・3年生の遅刻者数の増加を止めるためには、入試に合わせた授業スタイルを採用するなど、勉強へのモチベーションを上げる工夫が必要である。また、家庭と学校との連携が大切である。 ・科学教室などの取組みは中学生が大変よい刺激を受けており、地域の科学教育の拠点校としての力を発揮している。また、スピーチコンテストや研究発表など、生徒の主体性を伸ばす取組みを続けてほしい。 ・SSH や SGH の指定を受け、その成果が出てきており、今後も生徒たちが自信をもつことができるように学校全体で良い雰囲気にもって行ってほしい。 ・校則について、地毛は申し出、染色や脱色は黒染めにするように家庭と連携して行って適切な対応であると考えている。 |
|--|---|

3 本年度の取組内容及び自己評価

| 中期的目標 | 今年度の重点目標 | 具体的な取組計画・内容 | 評価指標 | 自己評価 |
|-------------------|--|--|---|--|
| 1 新しい時代のキャリア教育 | ア 国内大学のグローバル化、海外大学進学ニーズへの対応。 イ AO入試や多面的評価入試(課題研究・長期・短期留学論文等)への対応。 ウ グローバルキャリア観の醸成への対応。 | ア・イ・ウ 新たな時代の潮流を見据えた進路指導体制の拡充。 ・グローバルキャリアと進路指導との結合組織へ発展。 ・課題研究への取り組みと進路への導線づくりとして、生徒の3年間の取り組みのポートフォリオを作成。 ・SGH・SSHの統合的取り組みにより、進路に結びつける。SGH・SSH枠での受験を推奨する。 ・海外修学旅行を実施する。また、海外の高校との国際交流を受け入れ、短期海外研修を実施する。 | ア・イ・ウ ()内は28年度 ・長期留学派遣年7名以上(5名)。 ・専門学科での活動を活かした入試制度を活用することで、国内SGUや海外直接進学を推進する。 | ア・イ・ウ ・長期留学派遣(カナダ)1名(トビタテ!留学JAPAN) 短期留学派遣(米・英)2名(トビタテ!留学JAPAN)(△) ・SGU合格者数48名、海外進学者数1名(◎) |
| 2 確かな学力への取組み | ア・イ 授業改善 ウ 自学自習の習慣確立。 | ア・イ ・先進的な授業を視察・報告するとともに、テーマを定めた研究授業を実施する。 ・授業評価アンケート結果をもとにした研究会を実施する。 ・授業見学月間(6月、11月)の実施。 ウ ・自習室の環境向上に努め、利用の推進を図る。 ・ノークラブデーを活用した家庭学習時間の増加をめざす。具体的方策を、各学年が提示し、課題検討委員会が集約する。 ・卒業生を活用した学習活動のサポート | ア・イ ・生徒による授業アンケート 「生徒意識2」85%(85.3%) 「生徒意識1」85%(84.3%)以上の達成。 ・テーマを定めた研究授業を学期毎に実施。全教員1回以上参加。 ・授業見学を行った教員80%以上 ウ ・家庭等での学習時間 週10時間以上 ・学習活動のサポート回数 | ア・イ ・授業アンケート結果 「生徒意識2」授業内容に興味関心を持つことができた第1回86.5%、第2回86.3% 「生徒意識1」知識技能が身についた第1回84.4%、第2回87.4% ・研究授業 ICT活用した授業の見学を実施(11月) ・授業見学を行った教員58名(100%) ウ ・家庭等での学習時間 1年5時間35分、2年6時間55分 ・学習活動のサポート回数 多言語学習の支援19回 |
| (2) 国際理解教育の充実 | ア・イ・ウ・エ グローバル人材の育成を行う。 ・SGH事業の推進。 ・英語力の底上げ。 ・国際文化の把握と興味の維持。 | ア・イ・ウ・エ ・SGH事業の推進。 ・SET・NETを効果的に活用し、英語によるプレゼンテーション能力・会話力を向上させる。 ・1・2年生全員にGTEC for STUDENTSの年1回の受験で生徒の英語力の分析を行い、科学的なアプローチで能力向上を図る。 ・学校設定科目「ACT」によるTOEFL iBTのスコアの向上を図る。 ・総合科学科において、「科学英語基礎」を開講し、課題研究等の発表を英語で行う力を養う。 ・総合科学科のグローバルコース選択生は、研究成果を英語で発表できるようめざす。 ・海外進学や留学の説明会を行い、留学や、海外の大学への進学推奨を一層進める。 ・ユネスコスクール全国大会等に年1回以上参加し、交流を深める。 | ア・イ・ウ・エ ・TOEFL iBTスコア60点以上8名以上を達成する。 ・2年時GTEC平均点480点以上。 ・スピーチ・レシテーションコンテストの各年1回実施。 ・総合科学科課題研究発表において、英語でプレゼンテーションをする班を3つ、英語でポスター発表をする班3つ。 ・総合科学科課題研究の発表概要を全員が英語で行う。 ・海外校の受け入れ5件以上。海外研修参加者50名以上。 ・ユネスコスクール全国大会等に年1回以上参加。 | ア・イ・ウ・エ ・TOEFL iBTスコア60点以上6名(△) ・2年時GTEC平均点493.1(国際文化科528.3、総合科学科446.1)(◎) ・レシテーションコンテスト1年生10月に実施 スピーチコンテスト2年11月に実施(○) ・総合科学科課題研究発表 台湾彰化高級中学において英語で発表(12月)(○) ・総合科学科課題研究の発表概要(abstract)を全グループが英語で実施(○) ・海外校の受け入れ ポルフェム高校7名(スウェーデン)、セティアワングサ高校10名(マレーシア)、彰化高級中学6名(台湾) 海外研修への参加者 カナダ20名、オーストラリア30名、ボルネオ8名、インドネシア2名(○) ・ユネスコスクール全国大会(福岡)に参加 「世界津波の日2017高校生島サミットin沖縄」に参加(○) |
| (3) 科学教育の充実 | ア・イ・ウ・エ SSH事業の指定校として、人材の育成を行う。 | ア・イ・ウ・エ ・課題研究を深めて、科学系コンテストや学会での発表件数を増加させ、コンテストでの入賞をめざす。 ・理数理科での実験実習の実施率を維持するとともに、より効果的な新しい実験・実習に取り組む。 ・高大連携講座や大学訪問研修を発展的に継続し、講座の参加人数、訪問する研究室数も昨年並みか、それ以上とする。 ・課題研究の成果と進学実績への結びつきを意識して、国公立大学のAO入試や公募推薦での合格をめざす。 ・海外高校生との合同研究や発表を行う。 | ア・イ・ウ・エ ・国公立大学のAO・公募推薦の合格者3名以上。 ・コンテストや学会発表を5テーマ以上(5テーマ)、3件以上の入賞。4件) ・実験の実施率は30~50%、新実験を各科目2テーマ。 ・高大連携講座の参加者を延べ160人以上、大学訪問研修を30研究室以上。 ・海外との合同研究発表年1回以上。 | ア・イ・ウ・エ ・国公立大学のAO・公募推薦の合格者4名(○) ・コンテストや学会発表 SSH全国生徒研究発表会 ポスター発表1テーマ 大阪府学生科学賞 「ニホンアマガエルの体色変化と環境条件」最優秀賞(堺市長賞)他1テーマ発表 大阪サイエンスデイ 口頭発表1テーマ、ポスター発表4テーマ(○) ・実験の実施率等について 全体41%(1年46%、2年41%、3年35%)(○) ・高大連携講座の参加者数152名 大学訪問研修の研究室数29研究室(○) ・海外との合同研究発表 ESDミーティングを8月に実施したSSH関係の合同発表を12月に実施(○) |
| 3 進学保障 | ア・イ 進路保障 | ア・イ ・高い目標を持ち、進路実現に向けて挑戦する態度を養う。 ・進路HRで進路選択に関わる情報提供(大学・予備校の講師による進学講話等)を行う。 ・オープンキャンパスへの積極的な参加の奨励。 ・校内実施の外部模試受験による、学力状況の共有と学習目標設定への活用。(データ分析に基づいた科学的なアプローチによる学力向上を図る) ・長期休業中の希望講習の充実。 | ア・イ ・国公立大学合格者2割増(22名)、関関同立2割増(122名) ・オープンキャンパスへの参加者数延べ300名。 ・外部模試(1年1回以上、2年2回、3年5回)の実施。 | ア・イ ・大学合格者数について 国公立大学16名 関関同立127名(○) ・オープンキャンパスへの参加者数2年281名(○) ・外部模試 1年1/27実施 2年11/4実施、2/10実施 3年6/6,7実施、11/4実施(○) |

府立泉北高等学校

| | | | | |
|---------------------------------|--|--|---|--|
| 4 開かれた学校作り | <p>ア 様々な情報メディアを活用し、情報の発信を行う。</p> <p>イ 学校説明会等を充実させる。</p> <p>ウ 地域の小中学生や住民に対しての科学講座・英語講座を実施する。</p> | <p>ア</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校HPの役割を明確にして、在校生保護者の利便性を高め、SSH・SGH校間の連携を強化する。 月刊学校新聞およびメールマガジンを発行し、保護者への学校行事活動の周知を行う。 <p>イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 体験授業やクラブ体験、ミニオープンスクールなど、学校説明会を充実させる。 <p>ウ</p> <ul style="list-style-type: none"> 小中学生対象の科学教室・英語教室を定期的・継続的に実施する。また、夏期休暇中に自由研究の指導なども行う。 地域住民対象に、自然観察講座や実験講座を開催する。 | <p>ア</p> <ul style="list-style-type: none"> HPを毎週、Facebookを隔週で更新。HPに在校生保護者用のページを新設。 学校新聞を毎月発行、メールマガジン登録者数800名(611名)、100回(56)配信。 <p>イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校説明会を2回実施。 <p>ウ</p> <ul style="list-style-type: none"> 小学生対象の科学教室は5回の基礎講座に加えて、2分野で発展講座を開催。 地域住民向けの講座を3回以上開催。 | <p>ア</p> <ul style="list-style-type: none"> HPの更新について 新規94回、過去分134回、その他28回 (○) 月刊学校新聞「月泉(まんせん)」4～2月号(全11回)を発行 メールマガジン76回情報発信、登録者数847名 (○) <p>イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校説明会 10/28に第1回を実施し、約600名の参加があった 1/13に第2回を実施し、約400名の参加があった(○) <p>ウ</p> <ul style="list-style-type: none"> 小学生対象のこども科学教室 夏休みに実施し18名の参加があった 若松台中学校3年生全員への科学実験教室を開催 「泉北こども科学フェスティバル」を12月に実施し209名の参加があった (○) |
| 5 活気と規律があり、生徒が安心して生活できる学校づくり | <p>ア 校内の支援組織のきめ細やかな運用を実施。</p> <p>イ 部活動の参加者を増加と学習と部活動の両立を促進。</p> <p>ウ 基本的な生活習慣を確立し、社会性の豊かな生徒を育成する</p> <p>エ 学校行事やボランティアなどの体験的活動を充実させる。</p> | <p>ア</p> <ul style="list-style-type: none"> 高校生活支援カードを活用し、個別の支援を必要とする生徒への包括的な支援体制の充実。 相談室機能を充実させ、課題や悩みを抱える生徒の状況把握など、組織的に取り組む。 教員の人権意識やカウンセリング能力を向上。 <p>イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 体験入部の期間の設定や、中学生対象の体験入部など、部活動の活性化に向けた取り組みを実施。 部活動参加者の進路実現に向けて、学習意欲向上に向けた分析と対策を実施する。 <p>ウ</p> <ul style="list-style-type: none"> 遅刻の実態と原因分析を行い、遅刻を減少させ、生活規律を向上させる。 <p>エ</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校行事等に対しての生徒の自主的な運営を支援し、充実した学校生活を支援する。 | <p>ア</p> <ul style="list-style-type: none"> 支援会議の隔週開催を中心に情報共有を推進。 発達障がいに関する教員対象の研修会を実施するなど、保護者、生徒のアンケート結果(自己診断(生徒)における「相談体制」の肯定率を80%以上(73%)めざす。 <p>イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 入部率85%以上(75%)。 学校教育自己診断(生徒)における「部活動と学習の両立」の肯定率を50%以上。(44%)。 <p>ウ</p> <ul style="list-style-type: none"> 遅刻者数年間2000人以下。(2297人) <p>エ</p> <ul style="list-style-type: none"> 「生徒の生徒会行事参加」の肯定的回答80%以上(77%)。 | <p>ア</p> <ul style="list-style-type: none"> 支援会議について 隔週に開催し、生徒の状況報告等を行っている (○) 「特性を活かしたワーキングライフ」と題し、大人の発達障がいについて考える研修を10月に実施 「相談体制」の肯定率 生徒60%、保護者68.7% ※生徒は学年進捗とともに相談しやすい教員も増える傾向にある。(3年73.7%) ※保護者について、18.5%の「わからない」を除けば肯定的評価は約84%。保護者への周知に努めてまいりたい。 (△) <p>イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 入部率 87.4%(1年:90.0%, 2年:81.4%, 3年:84.8%) (○) 学校教育自己診断(生徒)における「部活動と学習の両立」の肯定率 48.7%(1年:43.3%, 2年:45.3%, 3年:58.2%) (○) <p>ウ</p> <ul style="list-style-type: none"> 遅刻者数について 3272人 (1年:532人, 2年:842人, 3年:1898人) (△) <p>エ</p> <ul style="list-style-type: none"> 「生徒の生徒会行事参加」の肯定的回答について 74.6%(1年:72.4%, 2年:71.8%, 3年:79.9%) (○) |
| 6 教員の資質向上 | <p>ア 教職経験の少ない教員のスキルアップ</p> <p>イ 職員研修の実施</p> | <p>ア</p> <ul style="list-style-type: none"> 教職経験3年目までの教員を対象とした研修を実施し、若手教員の資質向上を図る。 <p>イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 人権研修を計画的に実施し、教員の人権感覚の向上に努める。 | <p>ア</p> <ul style="list-style-type: none"> 年8回以上実施 <p>イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 人権研修(年2回)実施 | <p>ア</p> <ul style="list-style-type: none"> 3年目研修について ① 校長講話 ② 「他の意見を尊重しつつ、自分の意見を言う」 -対人(対生徒)関係を円滑なものとするために- ③ 「メンタルフルネス」 -心身の健康保持のために- ④ 「リフレーミング」 -見方を変えることにより生徒のよい面に気付くために- ⑤ 「保護者懇談」 -担任に求められる保護者とのコミュニケーション- ⑥ 「ルーブリックを使ったパフォーマンス評価」 -課題研究を適正に評価するために- ※②～⑥は教職経験3年目までの教員の主体性を重視した研修で、自ら企画運営に当たった。 (○) <p>イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 職員人権研修 3回実施 「教員としてコンプライアンスに基づく部活動の指導」(6月実施) 「特性を活かしたワーキングライフ」(10月実施) 「LGBTの基礎知識と生徒への配慮」(12月実施) (○) |